『國民新報』1940年9月8日

[主張]　矢繼早の喜び

　にをすべきことがとしてされ、これについて、より、それがをぜられたことをした。、と[に]、一のの三といふべきである。しかもこれらのが々三年ににをぶにつたことはなんといふであらう。なんといふありがたさであらう。

　がいよいよされるまでには、、そのののため、の日をすることはであるが、のとしてへられるところによれば、二十五年までにはのをるである。りとすれば、より十年には、のはをはずをけることゝなるわけであり、それまでには、日の四五よりして、十七年には六にり、かくのく年々のとをして、くとも二十五年までには、のをるといふのである。

　いふまでも[な]くは、の、をつくることであつて、はにをしてにけられせられるものである。はしてののをへるためではなくて、になをるためになされるものである[。]であるから、にをへることはそのをにふさはしきにてるためである。

　これはににしてのみはるべきではない。はのこと、にいてもである。[に]のをがすのはそのにして、をするゆゑんであり[、]つてにすることによつてのをし、いはゆるれたあるをうするのである。このはかのいはゆるにははつきりしてゐなかつた[。][、]がをけるのはのをたさんためののやうにへられたもあつた[。]日といへどもかゝるつたをいてゐるものがないともらないが[、]かゝるはにるものである[。]をかゝるよりめるものがあるとすれば[、]それはすべからざるといはねばならぬ。

　がになるにあたりにするは、しくのをし、のをして、のための、のためにせんためののをにすべきである。